

家族になりたい

全障研岐阜支部 寸田純子



どんな暮らしがいい？

当事者の学習会で、将来の自立を話題にしたときに、「一人暮らししてみたい？」とよく言われるので、自分でも一人暮らしができるのか、近所で重度の障害をもちながら、一人暮らしをしている知人や他の当事者に「一人暮らし」について教えてもらいました。そうしたら、ヘルパー不足で入浴は週3回が福祉サービスの「普通」になっている。また、夜の見守りのヘルパーさんが足りない。それに、近所の知人の場合、生活費だけで7万円くらいかかり、住む所があれば、なんとか年金で暮らしていけているけれど、実家を出れば家の無い私は、年金と障害年金生活者支援給付金だけでは「家賃」まで払えない！等のさまざまな問題が出てきました。

じゃあ、グループホームなら、暮らせるのか？以前、北欧のグループホームについて話を聞きました。北欧のグループホームは、各自の部屋に寝室と居間+台所+トイレ・シャワーがついているのに対し、私が住む地域のグループホームは、食堂、居間、トイレ、浴室、すべて共用で、寝室だけが自分のスペースでした。

グループホームなら、費用的には年金で暮らしていけそうですが、私が、高等部の時に暮らしていた寄宿舎は、病棟だったので、自分のスペースは、ベッドと床頭台だけ。トイレは、女子20人に対して5つありましたが、その5つはカーテンで区切られているだけだったので、常に他の人の

声が聞こえて全然ゆっくりできないし、3日間排便がないと浣腸をされるのがプレッシャーで、ますます出なくなりました。緊張を落とし難い私にとって、姿勢を保持できる設備があり、落ち着ける環境のトイレは必須です。だから、北欧のようにお風呂や、台所までは望まなくても、せめて自分だけのトイレは絶対ほしいです！

自分で選んだ「好きな人」と住みたい

だけど、狭くて古い中古住宅をリフォームした家でも、大好きな仲間と住めるのなら、それでも我慢できるかもしれません。

いろいろお話を聞いたり、調べたりして、私は将来、「一人暮らし」というより、「新しい家族」と暮らしていけたら…と思っています。どうして障害者は、その時そこにいた他人と暮らさなければいけないのでしょうか？ 普通の人が一生涯添い遂げるパートナーを選んだり、友だちとシェアハウスをしたりするのと同じように、障害をもっていても、「好きな人」と住みたいです！住める場所が限られていて、住んでいるのが、たとえ古い建物にしても、そこに一緒に住む仲間は自分で選びたい。平日の昼間は今の事業所に通所して、夜はグループホームで気の合う仲間や支援員さんと一緒に過ごして、休日は実家に帰って家族と過ごし、朗読劇団の仲間と活動を継続しながら、時には一緒にご飯を食べに行ったりして、大好きな人々と楽しく暮らせたらいいなと思っています。

(すんだ じゅんこ)

特集

暮らしの場は今



新型コロナ禍の下、家族依存の問題がますます浮き彫りになった障害者の「暮らしの場」の課題。「8050問題」に象徴される老障介護、入所施設の待機者、ロングショートと呼ばれるショートステイの長期滞在の問題：障害のある人の暮らしの場をめぐる現状が報道などでもクローズアップされています。

そんななか、さまざまな地域で暮らしの場づくりの運動がおこなわれてきました。この動きのなかでは、暮らしの場の問題は、一人暮らしかグループホームか、入所施設かといった「場」の問題にとどまるのではなく、障害のある人・家族の生き方、生活の質にかかわるものとして深められてきました。

今回の特集では、暮らしの場の現状と課題を知るとともに、障害のある本人・家族・関係者はどのような生活を求め、どういった希望をもっているのか、それぞれのねがいから考えていきます。「親亡き後」ではない、多様な一人ひとりの人生が大切にされるために、これからの暮らしの場のあり方をともに考えていきましょう。